

漢代鄭玄が訓釈した古代中国語の 対人関係機能について ——歴史語用論のアプローチ——

彭 国 躍

This paper analyses and classifies the ancient Chinese politeness appearing in the annotation of Zheng Xuan (127-200) in the Han Empire (206BC-220) from the perspective of Historical Pragmatics. Through the analysis of the annotation, the paper reveals one aspect of the understanding and study of ancient Chinese linguists over the functions of pragmatics played out in the interpersonal relations in the language.

キーワード：歴史語用論、対人関係機能、ポライトネス、敬語、鄭玄

1. はじめに

歴史語用論をテーマとする研究は、少なくとも2つの流れを踏まえる必要がある。1つは、語用論という術語の使用いかんにかかわらず、歴史上の言語に現われる語用論レベルの現象を扱う研究、いわゆる語用論研究の前史とも言える流れである。もう1つは、20世紀後半に現れた語用論研究の理論的枠組みや方法論を歴史言語に応用した研究の流れである。語用論研究のテーマの1つとして言語の対人関係調節機能について言えば、欧米の歴史言語学における honorifics 研究や、中国語、日本語における伝統的な敬語研究が前者の流れを形成し、Leech (1983) や Brown & Levinson (1987) などのポライトネス理論による歴史言語学への応用研究は後者の流れを形成する。

東アジアには、言語の対人関係機能に注目する長い歴史と伝統がある。それに関する言語データにせよ、解説資料にせよ膨大な情報が蓄積されている。金水 (2006: 68) が指摘したように、印欧語の外に、中国語や日本語は「歴史文献資料が大きくとぎれなく」続いているため、今後歴史語用論に貢献する上で大きな利点となっている。

20世紀80年代において、Leech (1983:137) は「謙遜の原則」(Modesty Maxim)、

Levinson (1983: 92-94) は「社会的直示」(social deixis)、そして Brown & Levinson (1987:179-181) は「ネガティブ・ポライトネス」(negative politeness) などの議論において、それぞれ中国社会や日本社会、日本語の敬語現象などを自らのポライトネス理論の中で解釈しようとする試みが見られた。その後の20年の間にポライトネス理論に基づく研究は、多言語間の比較や歴史言語への応用など時空ともに大きな広がりを持つようになった。いまや東アジアの伝統的な敬語研究と現代の語用論におけるポライトネス研究との接点を探る機が熟しつつあるように思われる。

2. 研究概要

2.1. 研究の目的

古代中国において、敬語・ポライトネス問題は訓詁学者の間で大きな関心事であった。漢代の訓詁学者、前漢(前206～8年)の孔安国、揚雄や後漢(25～220年)の鄭玄、趙岐、何休などの訓詁資料には、ことばの対人関係機能、敬語・ポライトネス関連の術語として「尊稱、謙稱、美稱、卑稱、賤稱、通稱、謙辭、卑辭」などが多く使われていた。その中でも特に鄭玄が敬語訓釈に使ったメタ言語は、量的にも多く、内容においても外に類を見ないほどバラエティに富んでいる。

本研究は、東西語用論研究の接点を探る試みの1つとして、歴史語用論の観点から、中国漢代(前206～220年)の訓詁学者が周代(前1020～前256年)のことばを研究する際に、その語用論レベルの現象、人間関係の調節機能についてどのように捉えていたか、その敬語・ポライトネス解釈の実態を明らかにし、その言語研究における学術的または学術的な位置づけについて論じたいと思う。

2.2. 先行研究

中国語に関する歴史語用論の先行研究として、彭(1993、1995、2001)、Skewis(2003)などを上げることができる。彭(1993)はLeech(1983)の「丁寧さの原理」(Politeness Principle)における「是認の原則」(Approbation Maxim)や「謙遜の原則」(Modesty Maxim)を軸に「価値的評価の原則」とその下位方略群を抽出することにより17～18世紀の近代中国語の敬語現象を記述し、彭(1995)は17世紀の口語体小説『金瓶梅詞話』の会話文に現れた「年齢質問」発話行為が持つさまざまなバリエーション、直接・間接発話行為が持つポライトネス機能およびそれらと発話参加者の社会的属性との関連について考察したが、彭(2001)は語用論におけるポライトネス研究の視点から『禮記』(前3世紀)に倫理規範として記述された言語行動、発話行為の禁則について分析した。Skewis(2003)では、18世紀の口語体小説『紅樓夢』における依頼発話行為の直接表現や呼称表現およびポライトネス・マーカー「請」が持つ対人関係機能などについて考察した。

本研究は、これまでの先行研究を踏まえながら、研究史的な視点を導入し、漢代の訓詁学者が周代のことばの語用論的現象に対する解釈の実態を解明したいと思う。

2.3. 研究対象

訓詁学とは古代中国における言語研究の一形態で、ことばの意味解釈を中心とし、音韻、表記、文法、発話含意、時代変化、地域変異などの解釈を含めた総合的な学問領域である。訓詁学は、その起源を辿れば周代にまで遡ることができる。周代の文献『論語』、『老子』、『孟子』、『荀子』などには、断片的ではあるが、すでにことばの意味領域、時代変化、地域変異などに関する訓詁記述が出現した。漢代になると、訓詁学は質量ともに大きく発展し、訓詁を専門とする学者が輩出した。

鄭玄(127～200年)は漢代を代表する訓詁学者の一人である。『後漢書・張曹鄭列傳』によれば、鄭玄は、漢代の訓詁学者馬融(79～166年)に師事したが、学業を終え故郷の北海高密(今山東省)に帰った後、官職の誘いを断り訓詁研究に専念したと記載されている。後世は、漢代を代表する訓詁学者として鄭玄の研究を、『説文解字』を著した許慎(58～147年)の「許学」に並べ「鄭学」と称した。

鄭玄が生涯訓釈した書物は80種類にもものぼったと言われるが、その多くはすでに散逸した。今に伝わったものには『詩経』、『禮記』、『周禮』、『儀禮』への訓注があり、外に転注、引用などによって間接的、部分的に伝わったものには、『尚書』、『孝經』、『論語』、『周易』の注釈などがある。

本研究は、『十三經注疏・阮元刻本』を底本とする『十三經注疏・整理本』(その内の『毛詩正義』、『禮記正義』、『周禮注疏』、『儀禮注疏』)(北京大学出版社)、『大戴禮記解詁』(中華書局)、『大戴禮記彙校集注』(三秦出版社)、『尚書今古文注疏』(中華書局)、『唐抄本鄭氏注論語集成』(平凡社)および『鄭氏佚書』(その内の『易注』、『尚書注』、『孝經注』、『春秋傳服氏注』)(東京大学所蔵)における鄭玄の訓釈文を考察の対象とする。

2.4. 研究方法

歴史語用論の研究方法について、これまで17世紀頃の小説『金瓶梅詞話』を考察した彭(1995)や、16世紀のシェイクスピア悲喜劇を考察した Kopytko (1995) などのように、Leech (1983) や Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論をベースに、それらの理論を検証し、補強するという演繹的な方法が多く使われてきたが、本研究は、2世紀頃の中国の訓詁学者が行った言語解釈を客観的に見るために、最初から特定のポライトネス理論によってデータを制限せず、実証研究の立場から、対象文献の全数調査を通して鄭玄が施した対人関係機能に関わる訓釈データを網羅的に収集し、帰納的な方法を使ってデータ分析を行う。

研究の手順として、まず上記文献の中で鄭玄が訓釈した対象言語の原文と鄭玄が使ったメ

タ言語の内容を提示する。そして原文と訓釈文に対して意味を解説し、その文脈的、社会的な背景および関連のある他の訓詁学者の解釈などについて補足説明を行う。最後に、鄭玄が訓釈した対象言語の性質、表現特徴について分析し、現代語用論研究の立場から鄭玄の敬語訓釈に見られる方法論的特徴を明らかにする。

3. 鄭玄の対人関係機能の術語とその訓釈例

対象文献の中で鄭玄が行った言語の対人関係機能にかかわる訓釈は延べ58回である。その中で訓釈に使用された術語は34個である。34個の術語はそれぞれ異なるテキストやコンテキストにおいて使われ、「謙稱、謙辭、謙」などのように類似した用語が複数使用されたため、ここでは鄭玄が使用した術語の表現内容に基づいて表1のように7種類にまとめて整理する。

表1

術語分類	鄭玄の対人関係機能術語（使用延べ回数）	合計	
①尊敬表現類	尊稱（2）、尊敬辭（1）、稱所尊敬之辭（1）、尊之（2）、應敬之辭（1）、恭（2）	9	58 回
②謙讓表現類	謙稱（1）、謙辭（2）、自謙之辭（1）、言之謙（1）、謙（15）	20	
③美化表現類	美稱（4）、美之辭（1）、美言（1）	6	
④失敬表現類	非敬辭（1）、不敬（1）	2	
⑤親密表現類	親之辭（1）、相親之辭（1）、彌親之辭（2）、親親之辭（2）、親愛之言（1）	7	
⑥身分表現類	賤稱（2）、卑稱（1）、貧賤之稱（1）、有徳之稱（1）、尊適卑（1）、於卑者曰賜、於尊者曰獻（1）、尊卑異文（1）	8	
⑦其他の表現	殷勤（1）、殷勤之言（1）、殷勤之意（1）、味冒之辭（1）、各以其義稱（1）、通稱（1）	6	

これから表1の分類に沿って、鄭玄が訓釈した周代のことばの表現内容と鄭玄が使用した訓釈術語の意味内容について逐一解説を行う。

3.1. 尊敬表現類

尊敬表現類の術語による訓釈は全部で9例あり、使用された術語は「尊稱、尊敬辭、稱所尊敬之辭、尊之、應敬之辭、恭」の6つである。これらの術語のいずれにも尊敬の意味を表す3つのキーワード「尊」、「敬」、「恭」のどれかが含まれている。この3つのキーワードの使用が「尊敬表現類」としてまとめた根拠である。

- (1) 「維師尚父」鄭玄注：「尚父、呂望也、尊稱焉」『毛詩正義』 p.1144
(ここに軍隊を率いる太公望呂尚がいらっしゃる) 鄭玄注：(「尚父」とは呂望のことで、尊称である)¹⁾
- (2) 「郷老、二郷則公一人」鄭玄注：「老、尊稱也」『周禮注疏』 p.264
(郷老は公が一人で二つの郷を担う官職) 鄭玄注：(「老」は尊称である)

鄭玄は、(1)では周代の名相太公望呂尚の名前に「父」をつけて呼ぶことについて「尊稱」と訓釈した。この訓釈は家父長制社会における「父」という語が父親以外の人に使用される場合に持つ語用論的対人機能に対する解釈である。(2)では地方官吏という身分表現「郷」に「老」をつけて呼ぶことについて「尊稱」と訓釈している。これは、「敬老」の価値観を持つ古代中国社会において「老」ということばが持つ語用論的対人機能に対する解釈である。『禮記・曲禮上』では「恒言不稱老」(普段話をする時に「老」と自称してはならない)と記し、現代中国語でも「～老」、「老～」がしばしば相手への尊敬表現として機能しているが、鄭玄の「尊稱」という訓釈は中国語研究史上「老」に対する初の敬語認定とすることができる。

- (3) 「跪奉觚曰賜灌」鄭玄注：「言賜灌者、服而爲尊敬辭也」『大戴禮記解詁』 p.242
(跪いて杯を手に取り「お酒をお注ぎいただきます」と言う) 鄭玄注：(「賜灌」と言うのは、承服し相手に尊敬の意を示す表現である)
- (4) 「畏子不敢」鄭玄注：「子者、稱所尊敬之辭」『毛詩正義』 p.314
(あなたが一緒になってくだらないだろうと心配する) 鄭玄注：(「子」とは尊敬する者を称することばである)
- (5) 「皇尸載起」鄭玄注：「皇、君也…尸稱君、尊之也」『毛詩正義』 p.960
(祭りで祖先の霊の代わりになる人「尸」が立ち上がる) 鄭玄注：(「皇」は君である。「尸」を「君」と呼ぶのはそれを尊ぶためである)
- (6) 「師尚父左杖黃鉞」鄭玄注：「號曰尚父尊之」『鄭氏佚書・尚書注五』 p.12
(師尚父は青銅のまさかりを手を持たれる) 鄭玄注：(「尚父」と言うのはそれを尊ぶためである)

(3)では競技で負けた者が杯を手に取り「賜灌」と言うことについて「服而爲尊敬辭也」(承服し相手に尊敬の意を示す表現)、(4)では男性に対して「子」と言うことについて「稱所尊敬之辭」(尊敬する者を称することば)と説明し、(5)では死者を「皇」と呼ぶこと、(6)では呂尚を「尚父」と呼ぶことについてそれぞれその対人機能として「尊之」(それを尊ぶ)と訓釈している。

(7) 「曾子曰唯」鄭玄注：「唯者、應敬之辭」『鄭氏注論語』 p.50

(曾子は「唯」と言う) 鄭玄注：(「唯」とは敬意をもって応答することばである)

(8) 「先生召無誼、唯而起」鄭玄注：「應辭、唯恭於諾」『禮記正義』 p.53

(先生に呼ばれたら「諾」と言わずに「唯」と言って立ち上がる) 鄭玄注：(応答のことば、「唯」(はい)は「諾」(うん)より丁寧である)

(7) では曾子が孔子に対して応答した感嘆詞「唯」について「應敬之辭」(敬意をもって応答することば)と訓釈し、(8) では先生に呼ばれて「諾」と言わず「唯」と答えることについて、「唯恭於諾」(「唯」は「諾」より丁寧だ)と訓釈したが、(8) の訓釈はことばの丁寧さの相対的な違いを明確に指摘したものである。

(9) 「思齊大任、文王之母」鄭玄注：「大任言京、見其謙恭、自卑小也」『毛詩正義』 p.1183

(厳かな大任、文王の母) 鄭玄注：(「大任」とは王室を指す。それは謙遜と尊敬の気持ちを表すもので自ら卑しめて「小」と見なす)

(9) では周の王室について「大任」と表現したことについて、「自卑小也」(自ら卑しめて「小」と見なす)と訓釈している。ここでは王室に「大～」と表現する場合の尊敬含意「恭」と、自ら「小」と位置づける場合の謙遜含意「謙」とを関連付けて、両者を表裏一体の現象として解釈している。『鄭氏佚書』における『尚書・夏書注四』(p.1)では、「大戦于甘」に対して鄭玄は「天子之兵故曰大」(天子の軍隊なので「大」と言う)と注釈しているが、この「大」は(9)の訓釈にも通じ指示対象の実際の規模というより、社会的ステータスに基づく尊敬表現である。

3.2. 謙讓表現類

謙讓表現類の術語による訓釈例は全部で20例で、鄭玄の対人関係機能訓釈の中で最も多かった。使用された術語は「謙稱、謙辭、自謙之辭、言之謙、謙」の5つである。謙讓、謙遜を表すキーワード「謙」の使用が分類の根拠となる。

(10) 「於内自稱曰不穀」鄭玄注：「與民言之謙稱」『禮記正義』 p.159

(諸侯は国内では「不穀」と自称する) 鄭玄注：(国民に対して言う時の謙稱である)

(11) 「其與民言自稱曰寡人」鄭玄注：「謙也、於臣亦然」『禮記正義』 p.166

(諸侯は国民に対して「寡人」と自称する) 鄭玄注：(謙遜で、臣下に対しても同様である)

- (12) 「天子曰予一人」鄭玄注：「謙、自別於人而已」『禮記正義』 p.1081
（天子は「予一人」と自称する）鄭玄注：（謙遜で、自ら他人と区別している）
- (13) 「天子未除喪曰予小子」鄭玄注：「謙、未敢稱一人」『禮記正義』 p.147
（天子は喪があけていない時には「予小子」と自称する）鄭玄注：（謙遜で、遠慮して「一人」とは言わない）

鄭玄は、(10) では国王の自称詞「不穀」について「謙稱」と訓釈し、(11) では国王の自称詞「寡人」、(12) では天子の自称詞「予一人」、(13) では喪があけていない若い天子の自称詞「予小子」についてそれぞれ「謙」と訓釈している。(10)～(13)の訓釈により、周代における「不穀、寡人、予一人、予小子」などの自称詞には、字義的意味による謙讓機能と、諸侯、天子しか使えないという位相に基づく絶対敬語としての機能の両方が備わっていたことが分かる。²⁾

- (14) 「自稱其君曰寡君」鄭玄注：「寡君、猶言少德之君、言之謙」『禮記正義』 p.1641
（自国の君を「寡君」と言う）鄭玄注：（「寡君」とは徳行の少ない君を意味し、表現上の謙遜である）
- (15) 「寡君有不腆之酒」鄭玄注：「寡、鮮也、猶言少德、謙也」『儀禮注疏』 p.331
（うちの国王は粗酒を用意しております）鄭玄注：（「寡」は少ない。徳行が少ないことを意味し、謙遜である）

(14) (15) では諸侯国の使者が他国の者に向かって自国の君を「寡君」と称することについて鄭玄はいずれも「寡」の字義的意味「少ない」と発話含意「謙遜」の両方を説明している。

- (16) 「蓋天子之孝也」鄭玄注：「蓋者謙辭」『鄭氏佚書・孝經注』 p.4
（これが概して天子の孝道である）鄭玄注：（「蓋」は謙辭である）

(16) では副詞「蓋」について、鄭玄は「謙辭」と訓釈している。宋代邢昺(932～1010年)の注疏によれば、隋代の劉炫(581～600年)は「夫子曾爲大夫、於士何謙？而亦云蓋也、斯則卿士以上之言、蓋者並非謙辭可知也」(孔子はかつて大夫の身分にあったので士(曾子)に対してどうして謙遜するのだろうか。ここでの「蓋」は卿や士以上の身分の人が言ったことばなので、謙辭ではないことが分かる)と説明した。唐の玄宗皇帝李隆基(685～762年)の『孝經注』では「蓋、猶略也」(「蓋」は「略して」と同じ意味)と注釈した。邢昺がそれらを根拠に「蓋非謙也」(「蓋」は謙遜ではない)と解釈し鄭玄の訓釈に異議を唱えた。(李2000e:8)しかし、周代では(10)～(13)のように、天子、国君など身分の高い人もその立

場相応の謙讓表現を使ったことから劉炫などの主張は必ずしも成り立たない。現在の語用論研究の観点から見ると、孔子は孝道とは何かについて語る時に、「自分にはそのすべてを語ることはできず、概略としてしか言えない」という謙遜含意を込めて言った可能性は否定できない。「蓋」に対する鄭玄の注釈は、李隆基などの意味論的注釈と矛盾するものではなく、むしろその意味論的解釈を踏まえた語用論レベルの含意解釈と見るべきであろう。

(17) 「某有枉矢峭壺」鄭玄注：「枉、峭、不正貌、爲謙辭也」『大戴禮記解詁』 p.240

(私は粗末な矢と壺を持っております) 鄭玄注：(「枉、峭」とは形が整わない様子、謙辭である) ³¹⁾

(18) 「寡人不佞」鄭玄注：「佞才也。不才者、自謙之辭也」『鄭氏佚書・春秋傳服氏注八』

p.4

(私、不敏な者でございます) 鄭玄注：(「佞」は才能である。才能がないと言うのは、自ら謙遜することばである)

(17) では自分が持っている「矢」と「壺」について「枉」(曲がった)、「峭」(歪んだ)と表現する現象について「謙辭」、(18) では自ら「不佞」(不敏だ)と表現することについて「自謙之辭」(自ら謙遜することば)とそれぞれ訓釈している。

(19) 「敢請女爲誰氏」鄭玄注：「誰氏者、謙也、不必其主人之女」『儀禮』 p.117

(恐れ入りますが、お嬢様の姓氏をお尋ねします) 鄭玄注：(姓氏を尋ねるのは謙遜で、その主人の実の娘である必要がないことを意味する)

(19) では求婚の場面で身分の高い者に対してその娘の姓氏を聞くことについて、鄭玄は「謙遜している」と訓釈し、その理由について「その主人の実の娘である必要がない」からだとして説明している。これは、「自分には図々しくも身分の高いお宅の実の娘をいただくなんて高望みはしておらず、姓氏が異なる養女や義理の娘でもぜひ嫁にいたいただきたい」という話者の対人的配慮に基づく謙遜含意に対する訓釈である。

(20) 「丘也小人、不足以知禮」鄭玄注：「謙不答也」『禮記正義』 p.1603

(わたくし孔丘は身分の低い者で、礼について十分な知識を持っておりません) 鄭玄注：(謙遜して答えなかった)

(21) 「某固願聞名於將命者」鄭玄注：「即君子之門、而云願以名聞於奉命者、謙遠之也」

『禮記正義』 p.1181

(私の名をお使いの方にお伝えしたく存じます) 鄭玄注：(身分の尊い君子に会う時、

お使いの人に名を告げたいと言うのは、謙遜して遠ざけるからである)

- (20) では、礼について聞かれた時に、孔子が身分が低く礼についてよく知らないことを理由に即答を避けたことについて、鄭玄は「謙遜して答えなかった」と訓釈したが、(21) では身分の高い初対面の相手に名前を告げる場合に間接的に表現することについて、鄭玄は「謙遠之」(謙遜して遠ざける)と訓釈した。

- (22) 「豈日無衣六兮」鄭玄注：「變七言六者、謙也。不敢當侯伯、得受六命之服、列於天子之卿」『毛詩正義』p.466

(正服を六着持っていないだろうか) 鄭玄注：(七を六に変えて言うのは謙遜するからだ。遠慮して諸侯と並ばず、六着の服を受け、天子の卿に並ぶ)

(22) では『詩經・唐風』の詩文「豈日無衣六兮」に対して、鄭玄は「七を六に変えて言うのは謙遜するからだ」と注釈し、その理由について「遠慮して諸侯と並ばず、六着の服を受け、天子の卿に並ぶ」と説明している。文脈情報を補って説明すると、周代では諸侯は天子から正装として七着の衣服を授かり、卿は六着の衣服を授かることになっていたが、話者の晋武公は晋国を併合したばかりの新しい諸侯で、周天子の使者に対して七着の衣服を授かりたいと願う一方で、謙遜して自ら卿に並び「六」と言ったということである。つまり、鄭玄が「謙」と解釈したのは、「六」という数量詞そのものではなく、身分にかかわる本来の数を減らし控えめに表現するという修辭法による対人機能である。

- (23) 「夫人日寡小君不祿」鄭玄注：「君夫人不稱薨、告他国君、謙也」『禮記正義』p.1348
(夫人の死を「寡小君不祿」と言う) 鄭玄注：(自国の君夫人の死を「薨」と言わないのは他国の君に知らせる時に謙遜するからである)

『禮記・曲禮』では「天子死日崩、諸侯日薨、大夫日卒、士日不祿、庶人日死」(天子の死は「崩」、諸侯は「薨」、大夫は「卒」、士は「不祿」、庶民は「死」と言う)と記述されているが、(23) では君夫人が亡くなる時に、自国使者が他国に対して「不祿」と知らせることについて、鄭玄は「薨」と言わないのは他国の君に知らせる時に謙遜するからだ」と訓釈している。鄭玄の訓釈には、君夫人が亡くなる時に通常では上位の身分に使われる「薨」と称することが含意される。鄭玄の訓釈により古代中国語の「死」の異形表現は『禮記・曲禮』で記述されたような身分の上下関係だけではなく、自国、他国というウチとソトの関係も影響していたことが明らかになる。⁴⁾

- (24) 「寡君有宗廟之事、不得承事、使一介老某相執紼」鄭玄注：「言欲入視喪所不足而給助之、謙也」『禮記正義』 p.1389
 (自国の君が祭事のため来られないので、自分が代わりに「紼」(なわ)を引くなど弔いのお手伝いに参りました) 鄭玄注：(葬式に必要なものを見てお手伝いしたいと言うのは謙遜するからである)
- (25) 「某固願見」鄭玄注：「願見、願見於將命者、謙也」『禮記正義』 p.1187
 (ぜひお目にかかりたい) 鄭玄注：(会いたいとは相手のお使いの人に会いたいという意味で、謙遜である)
- (26) 「問品味、曰子、亟食於某乎」鄭玄注：「不斥人、謙也」『禮記正義』 p.1187
 (食べ物の味について尋ねる時「その食べ物をよく召し上がりますか」と言う) 鄭玄注：(人にストレートにものを聞かないのは謙遜するからである)

鄭玄は、(24)では他国の葬式に参列する使者のあいさつのことば、(25)では話者が会いたいと言うこと、そして(26)では食べ物の味について尋ねる時の表現についてそれぞれ「謙也」と訓釈している。この3例はいずれも間接発話行為が持つ丁寧さの含意に関する訓釈である。

- (27) 「爲人祭日致福、爲己祭而致膳於君子曰膳」鄭玄注：「自祭言膳、謙也」『禮記正義』 p.1221
 (他人の先祖を祭る時には「致福」と言い、自分の先祖を祭る時に君子に分け与える場合には「膳」と言う) 鄭玄注：(自分の先祖を祭る時に「膳」と言うのは謙遜である)
- (28) 「予未有知、思曰贊贊襄哉」鄭玄注：「言我未有所知、所司徒贊明帝德、揚我忠言而已、謙也」『尚書今古文注疏』 p.88
 (自分に才能があるわけではなく、帝の天下統治にお手伝いすることを願うばかりです) 鄭玄注：(自分に才能があるわけではなく、考えているのは帝の徳行を讃え、自らの忠誠を示すことばかりだと言うのは謙遜である)
- (29) 「之子于歸、言秣其馬」鄭玄注：「謙不敢斥其適己」『毛詩正義』 p.66
 (この娘が嫁に行く、その馬に餌をたっぷり与える) 鄭玄注：(謙遜して、自分のところに嫁に来ることをあえて直接に言わない)

(27)では自分の先祖を祭る時にその供え物を君子に分け与える場合に「膳」と言うことについて、(28)では帝舜の名臣皋陶のことばに対して、それぞれ「謙也」と訓釈し、(29)では『詩経・国風』の詩文「之子于歸」(この娘が嫁に行く)に対して、鄭玄は「謙」と訓釈し、その理由について「自分のところに嫁に来ることをあえて直接に言わない」と説明している。

3.3. 美化表現類

美化表現類のメタ言語による訓釈は6例あったが、使用された術語は「美稱、美之辭、美言之」の3つである。美化することを意味するキーワード「美」の使用が美化表現類の分類根拠となる。

- (30) 「七日嬪婦」鄭玄注：「嬪、婦人之美稱也」『周禮注疏』 p.38
（七番目は嬪婦である）鄭玄注：（嬪は婦人への美称である）
- (31) 「願吾子之教之也」鄭玄注：「子、男子之美稱」『儀禮注疏』 p.55
（ぜひ先生に教えていただきたいです）鄭玄注：（子とは男性への美称である）
- (32) 「曰伯某甫」鄭玄注：「甫是丈夫之美稱」『儀禮注疏』 p.58
（伯だれそれ甫と言う）鄭玄注：（甫、これは男子への美称である）

鄭玄は、(30) では「嬪」について「婦人への美称」、(31) の「子」と (32) の「甫」について「男子への美称」とそれぞれ訓釈している。

- (33) 「辨六號」鄭玄注：「號、謂尊其名、更爲美稱焉」『周禮注疏』 p.780
（六種類の號を使う）鄭玄注：（号はその名を尊ぶために使用され、さらに美称として使われる）

(33) では祭事にかかわる6種類の神鬼、事物の「號」を使うことについて、鄭玄は「美称」と訓釈している。

- (34) 「予一人嘉之」鄭玄注：「嘉之者、美之辭也」『儀禮注疏』 p.597
（わたしはそれをうれしく思う）鄭玄注：（「嘉之」とはそれを賛美することばである）
- (35) 「請君之玉女、與寡人共有敝邑」鄭玄注：「言玉女者、美言之也」『禮記正義』 p.1572
（お嬢様にお越しいただき、私とこの国を共有していただきたいです）
鄭玄注：（玉女と言うのはそれを美化して言っているからである）

(34) では天子が「嘉之」と言うことについて「美之辭也」（それを賛美することば）と訓釈し、(35) では相手の娘を「玉女」と言うことについて「美言之」（美化して言っている）と訓釈している。『春秋左氏傳』（李 2000f p.495）では相手の足労を煩わせることを「擧玉趾」と表現しているが、(35) の訓釈は古代中国語における「玉～」が持つ美化機能を示したものである。

3.4. 失敬表現類

失敬表現類の術語は「非敬辭」、「不敬」の2例である。2例とも文字通りには「失敬、失礼」という意味を表すため失敬表現類として分類した。用例は少ないがマイナス待遇 (impoliteness、rudeness) 機能を明確に指摘した貴重な訓釈例である。

(36) 「嗟來食」鄭玄注：「雖閔而呼之、非敬辭」『禮記正義』p.370

(さあ、来て食べ) 鄭玄注：(可哀そうに思って呼んだとは言え、失礼なことばである)

(37) 「列事未盡不問」鄭玄注：「錯尊者之語、不敬也」『禮記正義』p.735

(目上の者が話している途中に問いかけをしてはいけない) 鄭玄注：(目上の人の話しを妨げるのは失礼である)

例(36)では『禮記・檀弓下』の中で齊国の黔敖という人物が飢えた人にかけてた命令発話行為「嗟來食」に対して、「非敬辭」(失礼なことば)と訓釈し、(37)では相手の話しを遮って質問することについて、「不敬」(失敬だ)と訓釈している。(37)の訓釈は言語行為そのものが社会的文脈の中で持つ対人機能に対する訓釈である。

3.5. 親密表現類

親密表現類の術語による訓釈は全部で7例で、それに使用された関連用語は「親之辭、相親之辭、彌親之辭、親親之辭、親愛之言」の5つである。これらの術語にキーワード「親」(親しむ、親しみ)が使われたことが分類の根拠である。

(38) 「某以非他故、不足以辱命、請終賜見」鄭玄注：「非他故、彌親之辭」『儀禮注疏』p.124

(身内なので、そうおっしゃっていただくと恐縮ですが、ぜひ会っていただきたいです) 鄭玄注：(身内のためと言うのは、親近感を示す表現である)

(39) 「非他、伯父實來、予一人嘉之」鄭玄注：「言非他者、親之辭」『儀禮注疏』p.597

(身内なので、伯父が本当に来たら私はうれしい) 鄭玄注：(「非他」と言うのは、親しみの表現だからである)

(38)(39)はいずれも「非他」(他人ではない、身内だ)という言い方に対して、「彌親之辭」(親近感を示す表現)、「親之辭」(親しみの表現)と訓釈している。

(40) 「某得以爲昏姻之故、不敢固辭」鄭玄注：「不言外、亦彌親之辭」『儀禮注疏』p.124

(姻戚関係にあるため、固く辞退するわけには行きません) 鄭玄注：(「外」を言わないのは親近感を示す表現だからである)

鄭玄は(40)では「昏姻之故」という発言に対して、遠い姻戚関係の「外昏姻」における「外」を言わないのは「親近感を示す」ためと訓釈している。

(41)「願吾子之教之也」鄭玄注：「吾子、相親之辭」『儀禮注疏』p.55

(先生に教えていただきたいです) 鄭玄注：(「吾子」とは相親しむ表現である)

(41)では相手を「吾子」(わが先生)と呼ぶことについて、「相親之辭」(相親しむ表現)と訓釈している。「子」は相手への「尊敬之辭」なので、親しみの含意は「吾～」という表現法によるものである。朱熹(1130～1200)は『四書章句・論語集注』において、孔子のことは「竊比於我老彭」(ひそかに商の大夫老彭と比べさせていただきます)について「竊比、尊之之辭、我、親之之辭」(「竊比」(ひそかに比べる)とは相手を尊敬する表現、「我」(わが～)とは親しみの表現)と訓釈しているが、鄭玄(41)の訓釈は、初めて古代中国語における第1人称代詞の所有格が持つ親しみの対人機能を指摘したものである。

(42)「天子同姓謂之伯父、異姓謂之伯舅」鄭玄注：「稱之以父與舅、親親之辭也」『禮記正義』p.156

(天子が同姓の諸侯を「伯父」、異姓の諸侯を「伯舅」と呼ぶ) 鄭玄注：(「父」や「舅」と呼ぶのは、親族として扱う親しみの表現だからである)

(42)では天子が親族でない同姓の諸侯に対して「伯父」、異姓の諸侯に対して「伯舅」と呼ぶことについて「親親之辭」(親族として親しむ表現)と訓釈している。

(43)「終遠兄弟、謂他人父」鄭玄注：「是我謂他人爲己父、族人尚親親之辭」『毛詩正義』p.311

(ついに兄弟と離れ、他人を「父」と呼ぶ) 鄭玄注：(ここで他人を自分の父として呼ぶのは、同族の間では親族としての親しみの表現を好むからである)

(44)「與子偕老」鄭玄注：「親愛之言也」『毛詩正義』p.345

(あなたと共に年を取る) 鄭玄注：(親密な気持ちを表す表現である)

(43)では『詩経・国風』の詩文「謂他人父」(他人を「父」と呼ぶ)について、鄭玄は「親親之辭」(親しみの表現)と説明し、(44)では「與子偕老」(あなたと共に年を取る)という表現について、「親愛之言」(親密な表現)と訓釈している。

3.6. 身分表現類

身分属性にかかわるメタ言語による訓釈は8例である。その術語は「賤稱、卑稱、貧賤之

稱、有徳之稱、尊適卑、尊卑異文、於卑者曰賜於尊者曰獻」の7つである。ここでの「賤、卑、貧」はすなわち「賤者、卑者、貧者」で身分の低い者という意味を表し、「有徳、尊」はすなわち「有徳者、尊者」で身分の高い者という意味を表す。

- (45) 「治家者不敢失於臣妾」鄭玄注：「臣、男子賤稱、妾、女子賤稱」『鄭氏佚書・孝經注』 p.10

(地方を治める卿や大夫は家臣下女に対しても配慮しなければならない) 鄭玄注：「臣」とは男性で身分の低い者の呼称で、「妾」とは女性で身分の低い者の呼称である)

- (46) 「世婦以下自稱婢子」鄭玄注：「婢子、婦人之卑稱也」『鄭氏佚書・春秋傳服氏注五』 p.9
(世婦以下の人「婢子」と自称する) 鄭玄注：(「婢子」とは婦人で身分の低い者の自称である)

- (47) 「八曰臣妾」鄭玄注：「臣妾、男女貧賤之稱」『周禮注疏』 p.38

(八には「臣妾」と言う) 鄭玄注：(「臣妾」は身分の低い男女の呼称である)

(45) では「臣」と「妾」についてそれぞれ「賤稱」(身分の低い者の呼称)と訓釈し、(46) では「婢子」について「婦人之卑稱」(婦人で身分の低い者の自称)、(47) では「臣妾」について「貧賤之稱」(身分の低い者の呼称)とそれぞれ訓釈している。

- (48) 「於外曰子」鄭玄注：「子、有徳之稱」『禮記正義』 p.171

(外国では「子」と言われる) 鄭玄注：(「子」とは仁徳ある者の呼称である)

(48) では国君が他国では「子」と呼ばれることについて、「有徳之稱」(仁徳のある者の呼称)と訓釈している。

- (49) 「賓辭、坐取觶以興。…介坐受以興」鄭玄注：「賓言取、介言受、尊卑異文」『儀禮注疏』 p.183

(賓客は辭退の挨拶をし坐ったまま杯を取り立ち上がる。…使者は坐ったまま杯を受け立ち上がる) 鄭玄注：(賓客なら「取」と言い、主人のお使いなら「受」と言うのは、尊卑の身分差によってことばを使い分けるからである)

- (50) 「凡王弔臨、共介鬯」鄭玄注：「以尊適卑曰臨」『周禮注疏』 p.604

(国王が弔問に来られる時には、酒で厄払いをする) 鄭玄注：(身分の高い者が身分の低い者のところに行くのは「臨」と言う)

- (51) 「其以乘酒、束脩、一犬賜人」鄭玄注：「於卑者曰賜、於尊者曰獻」『禮記正義』 p.1205

(四壺の酒、十本の干し肉、一匹の犬を人に上げる) 鄭玄注：(身分の低い者にあげ

る時「賜」と言い、身分の高い者にあげる時「獻」と言う)

鄭玄は(49)では杯を手取るという同一の行為について、賓客なら「取」と言い、主人のお使いなら「受」と言うのは、「尊卑異文」(尊卑の身分差によってことばを使い分けるからだ)と訓釈し、(50)では国王が来ることを言う場合の移動動詞「臨」(越される)について、「以尊適卑」(身分の高い者が身分の低い者のところに行く)と訓釈している。現代中国語でも「歡迎光臨」(いらっしゃいませ)において「臨」が敬語動詞として残っているが、鄭玄の(50)の訓釈は動詞「臨」に対する初の対人関係機能の解釈と言える。(51)では同じ概念的意味を表す動詞「賜」と「獻」が持つ身分差による対人機能について訓釈している。

3.7. 其他の表現

鄭玄の敬語訓釈には、上記の術語の外に次のようなメタ言語が使われた。「殷勤、殷勤之言、殷勤之意、昧冒之辭、通稱、各以其義稱」。これらの術語は言語の対人機能にかかわる含意解釈であることは間違いないが、上記の分類のいずれにも簡単に帰属させることはできない。

(52)「公問君」鄭玄注：「問君居處爲於、序殷勤也」『儀禮注疏』p.470

(公は君の行く先を尋ねる) 鄭玄注：(君にどちらに泊まるかを尋ねるのは、氣遣いを示すためである)

(53)「國君去其國、止之曰奈何去社稷也、大夫、曰奈何去宗廟也、士、曰奈何去墳墓也」

鄭玄注：「皆臣民殷勤之言」『禮記正義』p.142

(国を去る者を引き止める場合、その人が国君なら「どうして社稷を離れられるのでしょうか」、大夫なら「どうして宗廟を離れられるのでしょうか」、士なら「どうして墳墓を離れるのでしょうか」と言う) 鄭玄注：(みんな臣民の氣遣いのことばである)

(54)「樂只君子、福履將之」鄭玄注：「此章申殷勤之意」『毛詩正義』p.51

(愉快的な君子に、幸せがおとずれる) 鄭玄注：(ここでは氣遣いの気持ちを述べている)

鄭玄は(52)では長老の公が国君に対してその行き先について尋ねることについて「殷勤」(氣遣い)、(53)では国を去る国君、大夫、士に対する引止めの問いかけについて「殷勤之言」(氣遣いのことば)、(54)では『詩經・国風』の詩文「樂只君子、福履將之」に対して、鄭玄は「申殷勤之意」(氣遣いの気持ちを述べている)とそれぞれ訓釈している。

(55)「敢用絜牲交剛鬣」鄭玄注：「敢、昧冒之辭」『儀禮注疏』p.950

(はばかりながら子豚を供え物として使わせていただきます) 鄭玄注：(「敢」とは不躒を謝ることばである)

「敢」について、唐代の賈公彦（7世紀）は『儀禮注疏』（p.950）において「凡言「敢」者、皆是以卑觸尊、不自明之意」（「敢」とは、目下の自分が目上の相手に接する際身分の違いの自覚が足りないことを意味する表現である）と解釈した。日本において「敢」の辞書項目の解釈として、荻生徂徠（1666～1728年）の『訓譯示蒙・卷四』（1714年）では「遠慮氣遣ヒスル意」、釈大典（1719～1801年）の『詩家推敲・卷之上』においては「敬メイフ辭」とそれぞれ訓釈した。20世紀に入ると楊（1936）のように「表敬副詞」として分類されるようになったが、(55)における鄭玄の訓釈「昧冒之辭」（不躐を謝ることば）は「敢」の対人関係機能、敬語機能の解釈として先鞭をつけたものと言える。⁵¹

- (56) 「祭稱孝子、孝孫。喪稱哀子、哀孫」鄭玄注：「各以其義稱」『禮記正義』p.1373
 （祭祀の時には「孝子、孝孫」、喪中時には「哀子、哀孫」と自称する）鄭玄注：（それぞれの場面的意味によって呼び分ける）

(56) では祭祀と喪中という2つの場面における自称詞「孝子、孝孫」、「哀子、哀孫」の使い分けについて、発話に対するコンテキストの影響に触れて「各以其義稱」（それぞれの場面的意味によって呼び分ける）と訓釈している。

- (57) 「送子涉淇」鄭玄注：「子者、男子之通稱」『毛詩正義』p.269
 （あなたを見送り、淇水を渡る）鄭玄注：（「子」とは男性の通称である）

(57) では『詩經・国風』の詩文における「子」について、「男性之通稱」と訓釈している。「通稱」は「尊稱、謙稱、卑稱」のどちらでもない待遇上ニュートラルな表現として捉えた訓釈である。

4. 鄭玄の対人関係機能訓釈の特徴

鄭玄が訓釈した古代中国語の対人関係機能の特徴について、2つの側面から考察したい。1つは表現上の特徴、つまり鄭玄が訓釈した上記周代のことばは、どのような言語現象を指すか、語彙レベルか、文法レベルか、それとも発話行為レベル、談話レベルなのかを明らかにする。もう1つは方法論的特徴、つまり鄭玄はどのような視点から言語の対人機能を捉えたか、それが現代の語用論研究の立場からどう位置づけ、評価するかを明らかにする。

4.1. 表現上の特徴

鄭玄が訓釈した言語表現の属性を表2のようにまとめることができる。

表2

表現属性	鄭玄の対人関係機能訓釈の対象	計
名詞	皇／君／子／嬪／臣／妾／婢子／父／甫／舅／與／伯舅／伯父／膳	14
名詞句	予一人／予小子／不穀／寡人／寡君／吾子／非他／玉女／孝子 ／孝孫／哀子／哀孫	12
動詞	嘉／臨／不祿／取／受／賜／獻	7
動詞句	賜灌／願見	2
形容詞	老／大／小／寡／枉／峭／不佞	7
副詞	蓋／敢	2
感嘆詞	唯／喏	2
発話行為	敢請女爲誰氏／亟食於某乎／聞名於將命者／嗟來食／列事未盡不問 ／公問君（居處爲於）／奈何去社稷／奈何去宗廟／奈何去墳墓	9
談話	寡君有宗廟之事、不得承事、使一介老相執紼／丘小人也、不足以知禮 ／予未自有知、贊贊襄哉／之子于歸／與子偕老／樂只君子、福履將之	6
修辭法	變七言六／辦六號／不言外	3

鄭玄が訓釈した表2のような言語表現には、主に次のような特徴が見られる。

(1) 多様な属性による品詞分布

語彙レベルで見ると、鄭玄が訓釈した周代の敬語・ポライトネス表現は、複数種類の品詞に幅広く分布していることが分かる。その分布範囲は古代中国語文法論で「實詞」と言われる概念的意味を表す品詞類（名詞、動詞、形容詞、副詞、数量詞、代詞）6種類中の4種類（名詞、動詞、形容詞、副詞）と、「虚詞」と言われる文法機能や感情表出を表す品詞類（前置詞、接続詞、助詞、感嘆詞）の中の「感嘆詞」に及んでいる。

(2) 呼称を中心とする名詞型敬語の傾向

鄭玄が訓釈した敬語・ポライトネス表現の中で名詞と名詞句の表現が最も多く、両者を合わせると、64項目中の26項目で全体の4割を占めている。その名詞型敬語表現は「膳」以外はすべて自称詞、対称詞または他称詞などのような人間の呼称にかかわる表現である。鄭玄の敬語訓釈には、古代中国語が持つ、呼称を中心とする名詞型敬語の傾向が顕著に現われている。

(3) 発話行為、談話、修辭法が持つ対人機能の発見

鄭玄は、語彙レベルだけではなく発話行為、談話、修辭法が持つ対人関係機能についても訓釈を施した。この部分の訓釈は、鄭玄の言語現象に対する鋭い洞察と言語の構造的制限を越えた機能的な視点に基づくものと言える。

4. 2. 方法論的特徴—多様な敬語・ポライトネス視点

鄭玄が訓釈した古代中国語の対人関係機能は、現代の敬語・ポライトネス研究の視点に通じるものが数多く含まれている。鄭玄が使用した訓釈術語の中で、表1の「尊敬表現類」と「謙讓表現類」は、Brown & Levinson (1987)におけるネガティブ・ポライトネス (negative politeness) としてのストラテジー5「敬意を示す」(give deference)の機能、特にその中における日本語の敬語のような honorifics の基本的な機能(尊敬語、謙讓語)と共通する視点が用いられている。鄭玄の訓釈対象となる敬語・ポライトネス表現は社会的ダイクシス (social deixis) として文法化していないため、丁寧さの含意を算出する Leech (1983)の語用論的原理の内「是認の原則」(Approbation Maxim)と「謙遜の原則」(Modesty Maxim)の適用対象にもなる。そして「美化表現類」は日本語の敬語における美化語機能との間に、「失敬表現類」は Brown & Levinson (1987)における impoliteness、rudeness 現象や日本語におけるマイナス待遇表現との間に共通の視点が見られ、「親密表現類」は Brown & Levinson (1987)によるポジティブ・ポライトネス (positive politeness)に近い視点が用いられたことが観察される。さらに「身分表現類」は、言語運用の社会的変異にかかわる社会語用論的な視点が用いられたことが明らかである。

5. おわりに

鄭玄の言語解釈は経学、訓詁学という古代中国の伝統的な学問の中でなされたものだが、それを語用論という現代言語学のパラダイムにおいて整理し直してみると、そこには古代中国の訓詁学者の言語現象に対する見方、捉え方の一端が見えてくる。本論で示した鄭玄の訓釈は、語用論研究の立場から見ると、古代中国における多角な視点による言語の対人関係機能の解釈と位置づけることができよう。

注

- 1) テキストによっては「鄭氏曰」、「鄭云」、「鄭注」、「鄭箋」など異なる表記が使われたが、ここでは「鄭玄注」に統一する。表記上の統一を図るため原文中の表記記号を一部調整した。下線部は訓釈の対象となる表現である。日本語訳は文脈情報を補強して訳したものである。
- 2) 『禮記』の呼称体系と社会的変異について詳しくは彭(2002)を参照されたい。
- 3) 「哨」と「哨」は同じ語の異体表記である。ここでの引用は王(19世紀 p.240)の表記に従った。
- 4) 古代中国語の「死」の異形とその社会的変異については彭(2003)を参照されたい。
- 5) 古代中国語の副詞型敬語について詳しくは、彭(2008)を参照されたい。

用例出典

- 金谷治(編). 1978. 『唐抄本鄭氏注論語集成』、平凡社。
 黄懐信(編). 2005. 『大戴禮記彙校集注』、三秦出版社。

- 李学勤 (編) . 2000a. 『毛詩正義』 (鄭玄箋、孔穎達等正義、十三經注疏整理本) 北京大学.
 李学勤 (編) . 2000b. 『周禮注疏』 (鄭玄注、賈公彥疏、十三經注疏整理本) 北京大学.
 李学勤 (編) . 2000c. 『禮記正義』 (鄭玄注、孔穎達等正義、十三經注疏整理本) 北京大学.
 李学勤 (編) . 2000d. 『儀禮注疏』 (鄭玄注、賈公彥疏、十三經注疏整理本) 北京大学.
 孫星衍. 19世紀. 『尚書今古文注疏』 (十三經清人注疏、中華書局、1986).
 王聘珍. 19世紀. 『大戴禮記解詁』 (十三經清人注疏、中華書局、1983).
 袁欽鈞 (編) . 18世紀. 『鄭氏佚書』 東京大学東洋文化研究所所蔵 (漢籍善本全文影像資料庫) .

参考文献

- Brown, P. and S. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage* .Cambridge: Cambridge University Press.
 范曄. 5世紀. 『後漢書』 (中華書局、1997).
 金水敏. 2006. 「日本 (語) への発信・日本 (語) からの発信」、『語用論研究』 第8号、67-68、日本語用論学会.
 Kopytko, R. 1995. "Linguistic Politeness Strategies in Shakespeare's Plays". *Historical Pragmatics*. Jucker, A.H. (ed.) 515-540.
 Leech, G.N. 1983 *Principles of Pragmatics* .London Longman.
 Levinson, S.C. 1983 *Pragmatics* Cambridge: Cambridge University Press.
 李学勤 (編) . 2000e. 『孝經注疏』 (李隆基注、邢昺疏、十三經注疏整理本) 北京大学.
 李学勤 (編) . 2000f. 『春秋左傳正義』 (杜預注、孔穎達等正義、十三經注疏整理本、北京大学) .
 李学勤 (編) . 2000g. 『孟子注疏』 (趙岐注、孫奭疏、十三經注疏整理本) 北京大学.
 荻生徂徠. 1714. 『訓譯示蒙』 (『漢語文典叢書・第1卷』汲古書院 1979)
 小野寺典子. 2006. 「歴史語用論の成立と射程」、『語用論研究』 第8号、69-82、日本語用論学会.
 彭国躍. 1993. 「近代中国語の敬語の語用論的考察」、『言語研究』 第103号、117-140、日本語学会.
 彭国躍. 1995. 「『金瓶梅詞話』の「年齢質問」発話行為と敬語表現—社会言語学のアプローチ」、『言語研究』 第108号、24-43、日本語学会.
 彭国躍. 2001. 「古代中国の言語禁則とその社会的コンテキスト—『禮記』言語規範の研究」、『神奈川大学言語研究』 (23) 135-154、神奈川大学言語研究センター.
 彭国躍. 2002. 「古代中国語における呼称の社会的変異—『禮記』言語規範の研究」、『社会言語科学』 第5巻第1号、5-20、社会言語科学会.
 彭国躍. 2003. 「古代中国語における<死亡>の社会的変異—『史記』言語運用の研究」、『社会言語科学』 第5巻第2号、33-47、社会言語科学会.
 彭国躍. 2008. 「上古中国語の副詞型敬語の研究」『神奈川大学言語研究』 (特集号)、249-271、神奈川大学言語研究センター.
 釋大典. 1799. 『詩家推敵』 (『漢語文典叢書・第1卷』汲古書院 1979)
 Skewis, M. 2003 "Mitigated Directness in Honglou Meng: Directive Speech Acts and Politeness in Eighteenth Century Chinese." *Journal of Pragmatics* 35 : 161-189.
 孫希旦. 18世紀. 『禮記集解』、(十三經清人注疏、中華書局、1989).
 藤堂明保. 1986. 『鄭玄研究 儀禮士昏疏』、蜂屋邦夫編、401-492、汲古書院.
 許慎. 2世紀. 『說文解字』、(段玉裁注 18世紀、說文解字注、經韻樓藏版、上海古籍出版影印、1981).

- 張舜徽. 1984. 『鄭学叢書』、齊魯書社.
楊伯峻. 1936. 『中国文法語文通解』、商務印書館.
朱熹. 12世紀. 『四書章句集注』、(中華書局、1983).